

令和元年(2019年)秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・石崎大介・根本守仁

1. 目的

2019年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル、以下バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2019年9月20日から10月30日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）の116定点（北湖75定点、南湖41定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは北湖、南湖別にそれぞれ標準体長150、120mm未満を、ギルでも同様に標準体長60、50mm未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では312.4尾/ha（前年比318.2%）、南湖では1015.6尾/ha（前年比428.6%）と増加した（図1）。ギル当歳魚の生息密度も北湖で1057.6尾/ha（前年比1813.8%）、南湖で725.2尾/ha（前年比172.9%）と増加した（図2）。特に南湖のバス当歳魚と北湖のギル当歳魚の増加が著しく、今後、生息量の増加が生じないか、注視する必要がある。一方で、南湖のギルについては昨年度に引き続き、低水準であることから、琵琶湖南湖でのギルの生息量は当面、少ないまま推移すると考えられる。

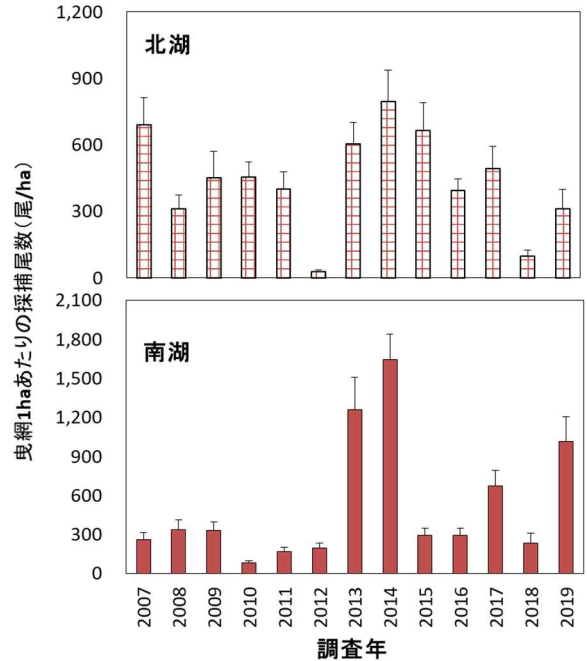


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

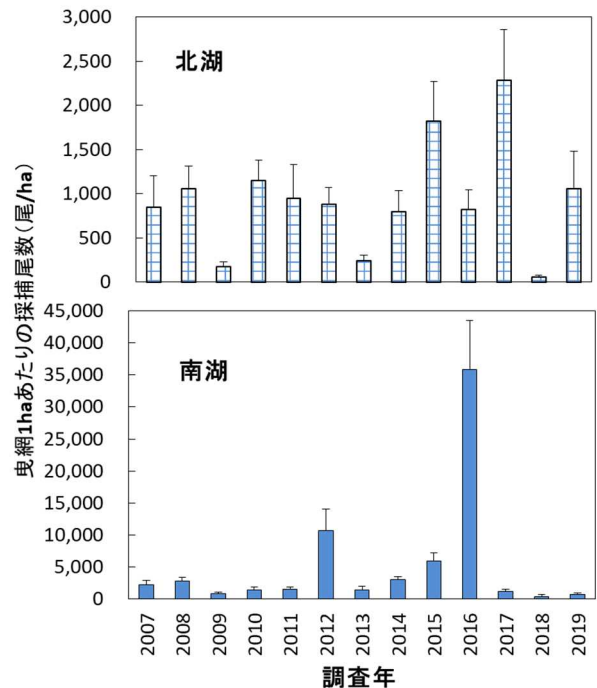


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）